

三重大学におけるグローバル人材養成と 英語によるコミュニケーション力

花 見 槇 子

Educating Global Personnel at Mie University and Communicative Ability in English

HANAMI Makiko

〈Abstract〉

University education is not a part of compulsory education in any country. It is for those with capability and volition in any country. Thus, an extreme egalitarianism will only give those who lack proper capability an agony and those who are blessed with capacity and willpower dissatisfaction and frustration. Internationalization of university education has been propagated for some time. Nonetheless, educating global personnel at a university must start with a group of students of an appropriate size for the university. In addition, it must apply efficient management of educational resources over the fences among faculties and centers on campus.

This article, firstly, examines the significance of Tri-University Joint Seminar & symposium, International Education Course in English, TOEIC-based English education and the series of faculty development programs titled “Offering Classes in English.” Secondly, it searches directions for Mie University to develop into the one which can produce global personnel.

キーワード：国際教育集会、英語による国際教育、英語教育、コミュニケーション力、ファカルティ・ディベロプメント

はじめに

大学教育は義務教育の一環ではない。能力と意欲のある学生に、その適性を伸ばす機会を与えるのが使命であると言えよう。したがって、極端な平等主義は、能力の乏しい学生には塗炭の苦しみを、能力に恵まれ意欲満々の学生には不満と失望を与えかねない。大学の国際化が叫ばれて久しい今日ではあるものの、グローバルに活躍できる人材を養成するとは言っても、その対象となる学生は、適度に少数のグループから始めなければならないだろう。さらに、学内の教育的資源を学部やセンター等の垣根を越えて効率的に活用する視野に依って立たねばならない。

本論では、三重大学から始まった三大学国際ジョイント・セミナー&シンポジウム、国

国際交流センターと共通教育との連携によって開講されている英語による国際教育科目、共通教育が必修科目として全学の新生に課している TOEIC ベースの英語教育、及び国際交流センターが主催しているファカルティ・ディベロプメント「英語で授業する」等の意義や内実を検討しつつ、グローバル人材を養成できる大学として三重大学が発展する方向を探りたい。

三重大学国際ジョイント・セミナー&シンポジウム：

三重大学国際ジョイント・セミナー&シンポジウムは、1994 年度より年に一度開催されている学生中心の学会形式による集会であり、三重大学、江蘇大学、チェンマイ大学がローテーションでホストを務めている。（花見 2010）ちなみに、2013 年度には三重大学において 20 周年記念集会が開催されることになっている。この国際教育集会の創始者は、伊藤信孝生物資源学部名誉教授と加藤征三工学部名誉教授であり、founder universities である三重大学のみならず、その年のホスト大学が複数の協定大学にも参加を呼びかけることによって、その規模は年々拡大し、世界的にも珍しいほど息の長い国際教育交流事業となっている。

両名誉教授の退官後は、三重大学においては、全学的事業として位置づけられたこの国際集会は、国際交流センターが中心となって毎年、参加学生の募集選考指導を含む企画運営を行っている。国際交流センターが、「英語による国際教育科目」を今日のように充実させる端緒となったのも、三重大学国際ジョイント・セミナー&シンポジウムに参加する三重大生の英語によるコミュニケーション能力開発の必要性に迫られてのことであった。

英語による国際教育科目（2006 年度より開講）：

日本語を使わず英語で授業をする国際教育科目を、国際交流センターが 2006 年度より開講し始め、2012 年度には年間 20 科目を開講するに至っている。これらの科目は、共通教育の統合教育科目の一群を占め、単位認定が行われている。その端緒となったのは、三重大学国際ジョイント・セミナー&シンポジウムに参加する学生の問題であったことは先にも述べたとおりである。

三重大学国際ジョイント・セミナー&シンポジウムに参加する日本人学生は、10 分間の研究発表はまずまずすつなくこなすものの、その後の質疑応答となると、ほとんどが手上げである。まず、相手の質問が理解できない。何とか理解できたとしても、その場で回答を英語で表現できない。こうした特徴を見て、国際交流センターでは、2008 年度より夏季休暇中の 8 月には、「論文作成法」（実技指導）、9 月には、パワーポイントを使った

論文発表と質疑応答の集中授業を開講する運びとなった。また、2010 年度からは、加えて、前期、後期に、「英語による論文作成演習」を開講している。

日本人学生は、1 年生、2 年生が多く、TOEIC も合格点前後、あるいはかなり得点の高い学生が受講する。これは予想外（当初、大学の基礎英語科目を修了し、一定の英語コミュニケーション力をつけた学生が受講することを予想、期待していた）。留学生と比べて、日本人学生の英語コミュニケーション力は低い。できなくても、何とか自己表現をしようとする意気込みも乏しい。欧米出身の留学生との比較ではむろんのことだが、アジア系（韓国、中国、タイ等）の留学生と比べても、日本人学生は、概しておとなしく、表情が乏しく、受け身であり積極性がない。将来、中高の英語教員になることを目指している学生にしては、いや、極端に緊張している、おびえている感があり、2、3 人の仲間同士で隣り合って座り、授業の様子をとりあえず見に来た、という風で、次回には消えてしまう学生が目立つ。近年は、留学生の受講が増えていく一方で、日本人学生がひとりも受講しない、という現象すら現れている。

人文学部「英語教育部会」による英語教育：

三重大学の英語教育は TOEIC ベースで、400 点以上を合格点としている。当初 600 点以上取得学生は受講免除となり、その他の新入生全員が必修である。新入生（1400～1500 人）全員を対象とすれば、多様な学生たちのことであるから、中には、英語なんて大嫌い、卒業後、英語を使って仕事する、英語力が必要となるような将来図、人生設計など全く描けない、想像もしないような学生がいたとしても不思議ではない。

にもかかわらず、それを必須科目とすれば、合格点をはるかに下回る学生の能力を引き上げるために、TOEIC 対策を中心とした授業、補講をする、など、どちらかと言えば、能力の低い学生対策に教員の能力を傾ける結果となることは否めない。共通教育委員会に対する学期毎の報告も、どの程度、またいかにして、合格点に満たない学生の能力を引き上げることが出来たか、を中心としたものとなっている。

英語教育部会長及び補佐の先生方とのミーティングにおいて「出来る学生は放っておいても自分でやる、出来ない学生を面倒みることこそが必要だ。そうしないと、彼らが可哀そうだ。」という趣旨の見解を聞いたことがある。つまり、教員の関心はひとえに「できない学生の能力をいかにして伸ばすか」ということにあり、しかもそれは、TOEIC の得点をいかに伸ばすかという点に凝集されている。

とすれば、授業のテキストとして、TOEIC 対策用の問題集を使用し、ある程度できる学生からは、「問題集をやるだけなら自分でもできる。」と、授業のあり方そのものの不

満も聞こえてくる。

では、TOEIC とはどのようなテストなのか？このテストで高得点を取った学生にはそれだけの英語コミュニケーション力があると認められるのか？SPU 春季英語研修（5 週間）に参加した学生の事後ミーティングで、一人 5 分の英語スピーチをさせてみたが、語学研修参加以前に受けていた TOEIC で、400 点台から 800 点台までの得点差のある学生たちに、英語力との相関性はほとんど認められなかった。

TOEFL や IELTS とは違って、そもそも TOEIC には、語学の 4 技能のうち、スピーキングに関するテストは含まれない。残る「読む、書く、聞く」の 3 技能だけである。とすれば、就職活動に邁進する日本人学生たちが、履歴書に TOEIC 450 点などと記入しようものなら、「私は英語コミュニケーション力がほとんどありません」と宣言するも同然ではないだろうか？

FD「英語で授業する」：

2010 年度に入ってもなく、英語で教えるということをテーマとしたファカルティ・ディベロプメントをやってはどうかという提案が国際交流担当理事より下りてきた。こうした FD は、英語のみで教えるコースの創出に向けて必須のことでもあるから、国際交流センターとして、それに関与するにやぶさかではないと考えたが、高等教育創造開発センターがある中で、国際交流センターが単独で行うのはなんとしてもおかしい話である。

そこで、当時の教育担当理事兼 HEDC のセンター長に共催を申し入れたが、共催はできないが後援ならばよいとのことであった。そこで、2010 年度、第 1 回の FD「英語で授業する」は、国際交流センター主催、高等教育創造開発センター後援ということで開催された。翌年度も同様である。（花見 2011, 2012）だが、2012 年度は、国際交流センターとしては、もはや「HEDC の後援」という実質を伴わないものは必要とはせず、単独で開催するに至った。

ちなみに、第 1 回の FD「英語で授業する」は、名古屋大学の高等教育開発センターから講師を招いて講演と質疑応答が行われた。英語を国際語として授業し学位を授与するようなコースを世界の名だたる大学が競って開講する近年の現象の背景を説明した上で、英語で授業するための有益なヒントを挙げていただいた。すなわち、1. 完璧な英語を目指さない、2. コースの全体像をしっかりと設計しシラバスを作る、3. コミュニケーションの手段を増やす（笑顔、アイコンタクト、配布物、パワーポイント等）4. 授業への学生の参加を促す（自己紹介、ペア学習、ディスカッション等）5. 学生の多様な英語に配慮する（不安を感じている学生への対応、ネイティブの学生の役割等）といった点にまとめら

れる。これらは、手軽なハンドブックとして出版され、その他のさまざまなヒントやシラバスの書き方や、教室英語表現リストなどまで含んでおり、英語で授業しようとする教員にとっては心強い資料となっている。(中井俊樹編 2008、2009)

次年度は、英語で授業することをめぐるのブレインストーミング(英語で授業することのメリット/デメリット、英語で授業しないことのメリット/デメリットの4項目)をまず行い、普段はなかなか口にできないさまざまな関心、心配、問題提起、意欲、期待、評価等々が明らかになり、有意義であったと言える。次いで、やはりグローバル13に選ばれている立命館大学から招いた講師によるワークショップに移り、授業の「講義型」から『アクティブラーニング型』への転換の必要性(情報を知識として定着させるには、アクティブラーニングの方が、パッシブラーニングすなわち講義型授業より効果的である)について、実際にアクティブラーニングをグループ毎に企画することを通して体験した。

今年度は、英語によるコミュニケーションの実力テストとして、近年、英国のケンブリッジ大学により開発され、世界的に広がりつつあるIELTSについてその特色を、ブリティッシュ・カウンシルから講師を招聘して学び、また、同じくケンブリッジ大学が開発したCLIL(Content and Language Integrated Learning)についても説明を受け、実体験してみた。

これまでのファカルティ・ディベロプメントを企画運営して感じることは、初年度の講演には50名近い参加者があったが、それ以降はいずれも20数名の参加者となっており、ワークショップ型のFDとしてはやりやすい面はあるものの、学内の関心がいまいち低いということである。

来年度の企画としては、CLILメソッドを実際に授業に取り入れている大学人(CLILは、小学生対象の英語教育などに積極的に取り入れられるようになってきているが、大学で授業に取り入れている人はまだきわめて少ない)を招いてワークショップをする、あるいは、初の試みとして苦勞を伴いながら英語で授業している大学人を数名招いてその体験を語ってもらい討論することを考えているが、このファカルティ・ディベロプメントの目標が曖昧であることが心配である。

グローバル人材養成：

近年、グローバルに活躍できる人材を、日本においてもいかに養成するかをめぐる大学や経済界でも議論や新しい試みがにぎわしい。グローバル人材とは、

- * 主体的に物事を考え
- * 多様な文化背景をもつ相手に自分の考えをわかりやすく伝え

- * 文化・歴史に由来する価値観や特性の差異を乗り越えて
 - * 相手の立場に立って互いを理解し
 - * 差異から個々の強みを引き出して活用、相乗効果を生み出し
 - * 新しい価値を生み出すことができる人材
- +外国語能力

ということである。（2011年度ファカルティ・ディベロプメントより）

グローバル13に選ばれた大学では、期限付きではありながらも潤沢な予算を用いて、留学生を主な対象として、英語だけで学位を取得できるコースの創出を目指して、準備を進めている。その中心となっているのが、高等教育開発センターといった名称（三重大学においては、「高等教育創造開発センター」という一段と立派な名称をもっている）をもつ学内組織である。

しかし、HEDCと略称される三重大の組織においては、大学教育の国際化を目指す各種取り組みの最先端にあるべき、英語による国際教育、日本語を使わず（日本語力が生活言語程度に限られていても）英語による専門教育で学位を取得できるコースをいかに創出するかといった課題は含まれていない。

言い換えれば、三重大学には未だもって、日本人学生、留学生の別なく、将来グローバルに活躍できる人材を養成するという明確な目標がなく、そのための具体的方針や戦略もない、ということになる。人文、教育、工学、医学、生物資源学の5つの学部・研究科を擁する三重大学は、戦後の国立大学創成期において、それぞれの前身校を集めて成り立ち、その結果として各学部の自治意識が強く、今でも5つのカレッジがひとつのキャンパスを共有しているかの観がある。

また、現在三重大学では、教養教育（共通教育）の改革の真ただ中にあるものの、全学部が足並みをそろえてその任に当たっているのか、またその中でグローバル人材養成という課題がどのように位置づけられているのかどうかは、現時点では定かではない。

おわりに

三重大学がさまざまな方面で大学改革を進めていることは理解する。しかし、「大学教育の国際化」または「グローバル人材の育成」ということに関しては、具体的かつ明確な全学的目標や戦略が定まっているとは認めがたい。そうしたなかで、統一性や連携を欠いたまま、英語教育や国際教育、ファカルティ・ディベロプメント等が進められるのは、非効率的であり、最大の犠牲者は学生たちである。

近い将来において、こうした課題が明らかになり、全学で共有されることを切に期待す

るものである。

参考文献

1. 花見槇子（2010）「3 大学国際ジョイント・セミナー&シンポジウムの更なる発展を目指して」『三重大大学国際交流センター紀要』第5号 pp.1-16
2. 花見槇子（2011）「三重大大学における英語による授業の展開とファカルティ・ディベロプメント」『三重大大学国際交流センター紀要』第6号 pp.111-125
3. 花見槇子（2012）「ブレインストーミング：英語で授業する/しない」『三重大大学国際交流センター紀要』第7号 pp.93-107
4. 中井俊樹編（2008）『大学教員のための教室英語表現 300』アルク
5. 中井俊樹編（2009）『大学生のための教室英語表現 300』アルク